

小林茂監督最新作

魂のきせき



山形国際ドキュメンタリー映画祭2025

「YIDFFネットワーク企画上映」にて初公開決定!!

10月14日(火)14:40~16:17 フォーラム3 (162席)

「魂の殺人」ともいわれる「性虐待」。ひとりが背負べき苦しみのなか。

絶望の先にある希望に手をのばす —— かすかな一筋の魂の光。

「深海に生きる魚族のように、自らが燃えなければ何処にも光はない」。ハンセン病の歌人、明石海人の言葉です。サバイバーたちもまた孤独にPTSDを抱えながら、かすかな声を上げてきたのです。

【解説】

友人が性虐待のフラッシュバックを起こしPTSDに苦しんでいる。長年それを見てきた監督が、性暴力サバイバーであるひとりの写真家と出会ったことから映画制作を決意する。

悔恨・解離・自傷・不眠・殺意・希死念慮などのPTSDを抱える彼ら。一見穏やかに見える日常と隣合わせにある絶望、そして希望。

8年という歳月。日々のやりとりを記録し続ける意味を問いながら、自らの過去にまで潜っていく監督。新たな一歩を踏み出す彼女たちの、その生きる日々の軌跡を見つめ続ける。



小林茂 プロフィール

1954年新潟県生まれ。柳澤壽男監督に師事。「阿賀に生きる」(1992・佐藤真監督、1993年YIDFF優秀賞)の撮影により日本映画撮影監督協会第1回JSC賞受賞。監督・撮影作品である「わたしの季節」(2005)は、重症心身障害者の心象を描いたとして文化庁映画大賞・毎日映画コンクール記録文化映画賞などを受賞。監督作品として「こどものそら」「ちよっと青空」「チョコラ!」「風の波紋」(2016・YIDFF・TIDF招待作品)などがある。腎不全の病気を抱え長期間の取材を通じ、人間の奥にある深層に触れようとする姿勢は一貫している。



監督:小林茂/ 撮影:小田香 / 録音:川上拓也
編集:秦岳志 / プロデューサー:長倉徳生・秦岳志
制作事務局 : 目黒秀平・須藤伸彦
日本/2025/日本語/カラー/DCP/97分
連絡先:有)カサマフィルム代表:長倉徳生
mail:nagakura@kasamafilm.com
TEL050-8885-7669

作品に寄せて

魂のきせき

榎谷秀一（YIDFFネットワーク）

唯一の答えなど無い答えを、小林茂監督は出演者と共に探し続ける魂のロードムービー。撮影の小田香の眼差しが優しい。

朝倉安都子（女のスペース新潟）

家父長制、加害者は顔見知り、小さい子が被害に遭っている、トラウマ、被害を後になって思い出すことがある、理解されないこと。全回復は難しいこと、PTG（Post Traumatic Growth）、表現して回復していくこと、男性の加害者への対応が足りないこと、また戦争との関係など、ほぼ網羅されていました。説明的ではなく、たんと、しかし、消せない痛みを持った日常を通して。

小森はるか（映像作家）

ほかに比べられる映画や表現がひとつも思い浮かびません。出演者の方々も、小林さんもスタッフのみなさんも、一人一人が生きてきて、今この映画が生まれたんだという、途方もない気持ちになりました。

語ること、他者と自分と向き合うことをあきらめない人たちの言葉に背中をおされて、わたし自身が人にしてしまった暴力と、人から受けた暴力にも、向き合いたいと、そういう力が湧いてきています。

渡辺祐一（合同会社アギィ）

この映画が、傷ついた“当事者”にとって、アートとしてどのような力を持ちうるのか、それは僕にはわかりません。けれど、「美しい魂のきせき」をなんとか映し出そうとする小林茂監督ご自身の姿に、あるいは、しっかりとした歩みを積み重ねてこられた高橋和枝さんとかつての和枝ちゃんとの邂逅に、深い感動を覚えました。美しい映画でした。

齊加尚代（映画『教育と愛国』監督）

自分の体の一部をどこかえぐられるようにも感じる重くてつらい内容ですが圧倒されました。なかでも、みやこさんの存在に心を奪われました。性被害者が自分を痛めつけ、身近な他者に攻撃的になる深刻な現実を突きつけられたのでした。その激しい感情は、小林監督だからこそ向けられたものだと感じます。その関係性の中で小林監督も満身創痕になりながら、ずっと向き合って誠実に関係を保ち、ここまで協働してこられたのです。ご自身の幼少期のご体験とも重なり、共に回復しようとする監督の情熱が痛いぐらい伝わってきました。

田中篤（長岡赤十字病院小児科医）

大変な力作で、相当なエネルギーを要したことと感じました。なかなか、様々なメッセージが重奏していて、色々と考えさせられました。見た人の立場や経験によって、受け取り方は様々だろうと思いました。

当事者にしか分からないことがあり、専門家などと安易に言うてはいけない、もっと耳を傾けなければいけないと痛感させられました。性被害を学ぶための教材としても大変価値のある映画だと思いました。

五十嵐奈穂子（にいがた映画塾）

今、ひとりで自分の理解者なんていない、と絶望している人に届けたい作品。いつか、もしかしたら明日、誰かや何かに出会えるかもしれない、希望はゼロではない、と感じられる輝石の映画でした。

小関和弘（和光大学・元教員）

雪の中にひっくり返った一本の赤い傘は、明るい故に厳しさを秘めているようでとても印象的です。この映画が（人の心の）明るさと暗さとの深く秘められたコントラストを描き出した作品であることの象徴になっていると思いました。

